

# 地中海

二〇二〇年 七月号 (通巻七四六号)

◇今月の二十首詠……百姓

山野幸司 2

## ■作品A

坂上直美・坂出裕子他 4

齊藤順子他 28

B 酒井綾子他 62

C 佐藤愛子他 74

A 三田享子他 88

## ■オリープ集

北山雪男・小原香里他 52

◇今月の二人

丹羽哲也・久保幸子 24

## ■御代田澄江歌文集『花の Rond』批評

44

湖にひそめる魚のこと

福島美恵子

導きだす豊饒な詩想

和田智子

茨城の律儀さ

磯田ひさ子

燃え続ける炎

浜谷久子

## ■追悼・小泉泰清

50

作品十二首 (宇井秀雄・選)

小泉泰清さんを偲ぶ

宇井秀雄

生き字引

山角和子

香川進の生きものの歌 21

田土成彦 23

## ■桃原邑子 自作を語る

15

私と短歌との出会い (215)

村石けさ子 27

◇夏のアンソロジー

伊東ミイ子 48

◇シルクロード・カフェ

【責任編集】

木村文字 58

■遊覧香港へマリー・ルイズの「ルワンダカフェ」 大寺智子 60

## ■歌壇月旦

61

気になったこと

磯田ひさ子

## ■五月号作品批評

80

A……………浜谷久子・横田敏子

玉井綾子・須川千恵香

B……………中山真弓・茂木 斌

C……………滝田靖子

オリープ集……………もとむらしげと

今月の二人・作品評

久我田鶴子 26

最近の歌誌より

【編集部】 79

神田通信……………104

〈写真・歌合わせ〉作品募集……………表3

(表紙デザイン) Tazuko Kyga

## 百姓

山野 幸司

孤独なるわが青春に泳ぎたるプールの隅にアメンボ遊ぶ  
 憧れの女マンドリン持ちながら五高の林ただ過ぎ行けり  
 反戦も原発も知らずストライキ自己満足の青春の夢  
 放棄地に斧振り降ろすノイバラの太き根方が地球を攪む  
 繰り返す五十メートルプール競泳の青年の背荒野をめざす  
 悩み等蹴とぼし逃げる孫達の鬼はいつでもじじいの仕事  
 パプリカの歌に合わせる孫達と輪なし踊るカラオケ天使  
 蓋を手にし立ち又坐り立ち止まり孫は前へと未来を拓く

昭和四十八年「地中海」入社。  
 沖縄の会所属。  
 桃原邑子に師事。

わが米に値段は付けぬわれが汗自然がすべて任せておりぬ

寒中も汗にまみれし放棄地の木々抜きならず朝も夕も

脱穀機求め農家をめぐり行く機械貧乏命は買えぬ

農機具のあれば楽する農繁期鋤を手を持ち畦作り行く

蝮谷放棄されたる田んぼありわが唐鋤と斧切り拓く

近隣の皆あきるる放棄地に蛙が歌い稲蘇る

天命と思ひし仕事稲作りわれを導く神の手があり

稲作の困難あれど拓けくる「出エジプト記」ふっと思いき

先人の智恵のあるべし米作り額の汗をふきふき励む

一年のすべてを農に統べらるる今の幸せ米を食らわす

一年中鳥が見ている農作業時には君と話がしたい

窈窕の少女の股のピンク色老年の胸ときめきし午後

# 作品 A

坂上直美

困難な状況

・天

佐久間 晟

日乗(三四)

・湾

音もなく人影もない朝の街このまま人は滅びていくのか  
乗客のいない電車やバスが行く運転手さえ消えていくかも  
何万年何億年後のこの星に人類はいるか確率は零

「恐竜はなぜ滅びたか？」恐竜を人類に変えて語られる未来

コロナ疎開億万長者の人々は宇宙へ移住滑りに暮らす

猫たちよ我らは滅びていくからに後の地球をよろしく頼む

Stay home! Save our lives! Be patient this difficulty!

坂出裕子

白梅

・洛

佐久間すゑ子

花の道

・湾

誰かのために咲くにもあらず雨のなか濡れつつ梅のかをり立ちくる  
夜目しるく香り漂ふ庭に立ち春の息吹を梅にいたたく

夜の庭に立てばかすかに匂ひくるひとり静かに咲く梅の花  
近づけば香りほのかに立ち来たり誰に見よとも言はで白梅

ころもとなきこと多き日々にしてほのかにかをる白梅の香の  
雪かともまがふばかりに白梅のはなびら土の上にはなやぐ

いつまでのいのちなるらむ残る日を大切にせむ梅の香れる

桜、桜、新聞テレビに知るのみの花見などとは思うのみにて  
公園の桜に街道桜の美しさそれより誘いくれし子の心に酔う  
戦時中は一斉に散るからよろしいと教えられしがやはり桜は爛漫が美し  
梅雨曇る空を支える群れ桜広げし枝の逞しき太さ

どこまでも続く街道の桜並木一途に揺れる若木の美し

久に見るさくらの花の美しさおのもおのもの姿のままに

帰り来て思うも嬉し桜花見その美しさは伝えるもどかし

小さな小さなハコベの花を数えている。春が来た庭に

今年も咲いた辛夷の花を二人で見上げて今日が始まる

辛夷の花は今年も咲きました。二人の命の証のように

今年も咲いた辛夷を見ていると涙で空が花の色にひろがってゆく  
誘われて出て行く夫を見送る。「お姑さんゆっくりしてね」に胸が熱くなる

花の道。今頃はどこに居るだろう長男夫婦に誘われた夫

花の精に心を解かれて帰って来た夫に手を合わせたくなる

佐藤道子 空しさ 甲

夫逝きて空しさばかり暮る日を生きねばならぬ子供等のため  
夫と会ひしことのみ確かな夢なりきいかなる場面か消えてさみしき  
白寿までこの世に在せし有難さしみじみ思ふさみしさの海  
うつりたくはなけれどコロナその時は急いで亡夫のもとへ走らむ  
亡夫の著書私に難し愛読の藤沢周平読みつつ偲ぶ  
何事も夫ありてこそ常なりき温泉旅行も今はむなしき  
何ひとつしなくてもよい夜が好き無心に寝ませうふとんに包まり

椎名恒治 感染 橋

新型コロナウイルスの感染はたちまちに世界を圧す  
CDCに国境なしとコロナウイルスの感染限りなき  
かつてわが住みたりし江古田の病院もコロナウイルスたちまち圧す  
かかる厄災は第二次世界大戦以来の試験なりといふ  
七十五年前の敗戦の春の桜の盛りを想ふ  
ウイルスの厄災にかの大戦の年の桜を想ふ  
校庭の桜は咲けど生徒をらずコロナウイルスの蔓延

鈴木結志 アナベルの雪山 福

「アナベルの雪山」と名を付される紫陽花の景夏の白雪  
知恵蔵の宝庫に重ぬ紫陽花のはなの絶景ユートピア生む  
紫陽花の茵しとねに日向ほこをするあまがえるの子育つ夢園  
よろこびの泉のごとし紫陽花の七変化秘むアナベルの雪  
あじさいの花の変化や進化型夢を見させるまなこひき込む  
A1は紫陽花変化如何に読む反応というより表現興味  
あじさいの変化の色にあらためて洗礼さるる思いに見つむ

関根榮子 手作り 埵

家ごもることは時間の使い方あるいは無為の時間も過ぎて  
筆力を培うか否や新聞のコラムを夫の日々書き写す  
歩み行く鉄路のほとりの朱の群れの野性化したるけしの花群  
ひと言も話さず消えし母の夢朝一番に水を捧ぐる  
葉桜の参道暗く続きおり今年の花見いつしか過ぎて  
かの家の名残りなるべし白々と水仙一株咲ける更地に  
思い立ちガーゼマスクを作りおり音はすべて手作りだった

関根和美 聖母月 埵

烙印を押さるる思いニュースより基礎疾患のことばが刺さる  
死はいずれ免れざるもいつどこで如何にというに誰が手の及ぶ  
聖職者の感染死あまたのイタリアのひしめきならぶ柩が映る  
「私をお使ください」しんしんとマザー・テレサの祈りに触るる  
実感のやや乏しくも厳肅なるミサ配信にあずかれる幸  
つきつきに花咲き盛り入れ替わりふいに若葉の闇に踏み入る  
薔薇の香を放つロザリオ練りつつもこころ暗れざるこの聖母月

高尾恭子 春愁 大

うすべにのハナミズキ咲く空はれて何をぐずぐず足ふみならず  
公園の散歩おわれば午前九時 不要不急の身の置き処  
弁当をふたつ買おうか昼どきの町はマスクに表情を消す  
泣き顔も笑い顔もありぬべし仮面のごとき大型マスク  
春キャベツ青々として隣り家の幼な窓から声はりあげる  
太すぎる大根百円スイングにのって千六本に刻んでみたし  
しずけさは波の序奏かコンコースの仮面劇は始まっている

## 高津砂千子 大野東センター 風

宮島の山なみ眺めセンターへ歩いて十分朝のならいに  
 咲き揃うこでまりの白ゆれゆれてわれを招くよ朝を迅く庭  
 被爆して枯死寸前のアオキリがながらえ二世を残ししという  
 センターの庭にも育つ被爆アオキリ二世は緑の広葉たくわう  
 草原に黄いをばつんと灯せるはマツヨイゲサの透きとおる花  
 ぐうーんと背のばしベンチに背を伸ばす見えるよ見える逆さ梅の木  
 うす紅を溶くるかのごと空染めて朝日はやがて昇りくるらし

## 滝田靖子 春 新

春告げる鳥の声がする感染予防に窓開け放つナースステーション  
 唯一の日向たやすく手放して居場所なくひとりただ暮らしてゐる  
 職場よりほかに居場所などなくて手放した日向の恋しい夜あり  
 胸うちに住んでゐるんだらう泣き虫で寂しがり屋のわたしつてやっ  
 手放してしまつた日向を恋しいと思ふのは止める春が来たのだ  
 若き日に出会ひし大切なひとり君の闊病十三年目に入る  
 ポケットに入れたまま出してしまひたる手袋もクリーニングされて戻りぬ

## 竹下妙子 明暗 霧

底知れぬコロナウイルスの終息は生きものが死に 天体のみか  
 この夕ベスパーバームーンにめぐり合ふほのくねなるに輝きわたる  
 リハビリ終へバス停に待つかたはらをワラビ摘み来し親子帰りに  
 庭すみにとどく春の陽待ちて咲く黄のひとろのタンポポの花  
 春雨の降るとしもなき夕ぐれに濡れて光れる若葉を思ふ  
 春風にひろげし双手のさびしくて温かき風よ置き去りにすな  
 くれなるのかすかにまじる白椿虚しき時に紅ぞ恋ふ

## 田土成彦 鶯 宙

孫が歩きはじめしころを思はせて鶯が下手な声に啼き出づ  
 たばこを吸ひ酒をたらふく呑みし人八十九歳の生涯を遂ぐ  
 水たまり避けてよろけて靴下を濡らして帰る子供のやうに  
 かささぎの渡せる橋が銀河ならば涼を求むる夏の夜の歌  
 一本の蛸の足つくづく眺めつつイボの数なども数へて見たし  
 若草の蔭覆ふまで伸びるるを一週間後の散策に知る  
 君といふ字にはコロナを秘むるゆゑ君もコロナを秘めつつ怯ゆ

## 田土才恵 赤芽柏 宙

コロナ禍の春を騒がず遣りすす隠り居の人の柔らかき声  
 へなへなと無花果若葉の拡がれる気温二十度季が過ぎ行く  
 嫁ぎ来てこの地に馴染むわれならん庭の椿も無花果の木も  
 色褪せて赤芽柏の時はゆく変わらぬ夏の訪れを呼び  
 散歩には互みの思いそれぞれに今日はひとりの気儘を選ぶ  
 旅に見し瀬戸の内海霞み立ち今はおぼろとなりゆくひと日  
 下灘の駅近くして菜の花は霞む海辺に淡くひろがる

## 玉井綾子 ハノン一番 羊

マスクする気振りも大事付着する脂粉を厭い駅で化粧す  
 昨日は八万六千四百秒も前のことなり新聞古ぶ  
 エアメールが出せない今はスマホにて散歩コースの写真メール送る  
 歩くこと目的で行く河川敷ずつと脳裏にハノン一番  
 子と二人デザート作るキッチンに甘ったるいこそばゆさの満つる  
 見も知らぬ人から知人の知人へと包圍網のごとコロナ禍せまる  
 前月末書きし予定を消せぬままステイホームのひと月過ぎぬ

虎谷 信子

わかれ

・伴

分家の刀自 先立ち逝かる 哀しきよ。女学校にて共にまなびぬ  
電話での会話の日を かさねしも。病み給ふとは氣付かずすぎぬ  
保護司とふ おほやけのこと務めらる。人生さまざま話題ゆたかに  
とむらひに 親しくゆけぬ己が身を、託びつつ合掌安らげくませ  
コロナウイルスまこと恐ろし。連日に、人の生命をうばひつづける  
すべての人 マスク姿の異様さよ。何かが狂ふ 日日落着かぬ  
マスクせぬ家居の独り居 テレビによる。再放送も亦良しとせむ

中 島 央 子

籠る

・森

さつま芋一箇が主食の戦時中思へばこれしき籠城の日々  
籠城に倦みし心にネジを巻く松阪牛のステーキにせむ  
背をのぼし踵落しのストレッチ プールの閉鎖いつまで続く  
スニーカーの藍にふみしむ歩一歩赤芽柏の垣に沿ひゆく  
瓶にさす八重桜の小枝に花みちて籠りの日々眼なくさむ  
夕暮は日に日にのびて罪のなき蟄居の部屋の間まで照らす  
かげりつつ照りつつ変はる白雲のゆくへ目に追ふ夕暮るるまで

中 島 義 雄

邦病みて

・岡

コロナ禍の苦痛に歪む列島に神の差配の桜満ちたり  
いたつきの深き国内にさくら咲き人はマスクを押さへて仰ぐ  
祝福を受けぬさくらの咲き満ちてその下闇に人は嘆かふ  
咲き満ちて花かけ昏き下闇にマスクぶかぶか誰にも言ふ  
跋扈する新型コロナにかぶさりて咲き散る桜を花と呼ぶのか  
水を待つ一樹のごとく立ち尽くし混沌と逝く春を送りぬ  
さくらさくら身を打つまでに吹き散れよまた来む春をわが期しがたし

永塚 節 子

あれから

・銀

危機察知能力健在タイ行きをキャンセルせしは一月半ば  
感染者四名の報に止めようね心残るも決めたるあの日  
増え続ける感染者数に目を見張る三月四月五月に入るも  
常なれば心なびかぬ花水木風にゆるるを飽かず見ており  
うつつと過ごす日日自らをバッシングする花など植えて  
ようややくに書店再開求めしはパスタ・雑草・中村哲さん  
しなやかに否したたかに生きのびる雑草の知恵われも持ちなん

白 子 れ い

今年は異状

・洛

花散るも水面彩る花伐華やきの無し今年のさくら  
いつもより長く咲きいてチラリチラ疲れ果てしか花びら小さし  
ウイルスに奪われたりやその命驚来らず今年も異状  
湯気立つとみれば水面に水蒸気卯月おわりの朝の疏水  
鶯の来啼かぬままに春は逝く暖冬の所為それともコロナ  
朝は散歩夕べは庭の草を引き外気に触るる一時間ずつ  
九十余年生きてはじめて出遇いたりコロナウイルス見えざる魔物

ば ば り ょ う こ

ノアの方舟

・鹿

カトレアの精とも紛うおひとより花をいたたく真紅のいろの  
小枝には雨後の露玉きらめかせにびいろの空明けてゆくなり  
R音のこの年まがまがし笛たいこ体内時計を逆回りさす  
地球という星にかつては人類の住みにしということにならぬや  
ゆれゆるるノアの箱舟現代の神話恐慌コロナウイルス  
月光は吾を照らしたりたましいの牙ゆるるまで鋭く研ぎてゆきゆく  
ためらいもなく表裏一体をさらけだす昨日と今日の人間関係

浜谷 久子

姫様

・地

蟻螂の卵鞘消える玄関のからんと寂しく畑野を見やる  
馬鈴薯の芽のふとぶとと伸びくる日四月遅霜負けず傷まず  
ひと畝の菜花今年の常備菜摘んでは食べて食べては摘んで  
子どもらの姿見えなくなる四月コロナ状況影くろぐろと  
籠もる日は家人の好物いなり寿司誕生日でも節句でもなく  
あざやかな花一筆箋贈られるコロナに忘れていた華やきを  
麗しく姫様すつくとチューリップ今にも始まりそうな舞踏会

浜本 芙美

花を見上げる

・夢

「桜で咲くより梅で咲け」つぶやきながら花を見上げる  
人の顔覚えるというカラス電柱に止まりこちら見ており  
障子ごしの日差し明るく怠惰なる心を弥生の戸外へみちびく  
ひとつずつひとつずつ熱せと景子さんの少しきつめの言葉にれがむ  
映像みて批判ばかりして楽しめるこれも良いかな老いたるふたり  
愉快な植物ゆかいな歌世の中すべて愉快はいいな  
真剣とうごとはにしばし背をむけてあるままなるまま歩いてみよう

楢垣 美保子

踊り場

・昴

きょう五月メーデーに人の声のなく蜂の羽音のまつわる真昼  
ははに腕貸しつつのぼる階段の踊り場にかたさ踏みしめて立つ  
さよならを「さばよほなばらば」とことなく暗号めかし呟く空へ  
散りどきを申しあわせて並木道はなびらはなびら花水木散る  
けふる雨青信号の点滅を数えつつ待つ安全地帯  
五円玉ひとつ一円玉四つびたりと捌けてかなしむがまくち  
祝祭の日の曇天の「ステイホーム」遠く近くカラス鳴きあう

福田 庸子

マスク

・今

咲く花を雪間に伸ばす白菜に冬の蓄へまざまざと見つ  
山の田を見放く道をとどりきて古木の梅の香につつまれぬ  
先人の植ゑたる梅よめくみたる光に目覚め香をただよはす  
枝先に灯すくれなる産土の祠のもとに八汐つつじは  
川の音電車音のほりくる山の神社に祝詞しみゆく  
ガーゼマスク二枚で民の不安との自信たつぶり総理の資質  
庶民を知らぬ世襲の大臣らは官僚に仕切られ恥と思はず

藤田 美智子

母の日

・新

いつか着るいつかは読むといふいつか桜の花はとうに散りたり  
養母には生母より値のよきものを選びき母の日のプレゼント  
子への期待なかりしと言へば嘘になる八重に咲きたる花の重たさ  
ガリを切ることくカツカツ文字を書く君はまだもつ若きころを  
〈新しき〉と言はれても気分は変はらない使ひ込みたる鍋磨きをり  
二メートルの距離を保たば難かりしよ彼の日の君の耳打ちなどは  
休校の続く校庭の雲梯を五月の風が渡りゆくなり

藤森 巳行

五月

・銀

何処からか桜花びら舞い来たり我が家の窓に三枚張り付く  
ウイルスを吹き飛ばすため窓開ける五月の風は何故か虚しい  
私の心の垣根に紅く咲く五月のバラは雨に打たれる  
パンデミックとふ言葉の重さ噛み締めてお出かけ控へる五月の連休  
生きるとは不幸を乗り越え進むこと幸せになるのが人生の目的  
我が妻に依存症なり和子病不思議な縁前世からかも  
激動の時代を生きる我が人生短歌を友に短歌と遊ぶ



船田清子

卯月の満月

・天

はからずも「卯月の満月」四・八日射抜きてたもれコロナウイルス  
 花水木・さつき赤・白咲き揃ひ注ぐ陽ざしを謳歌してをり  
 陽に透けるいちやう並木のさみどりよコロナの鬱を蔽ひ清めよ  
 咲き盛る桜花の城を俯瞰せる雪の岩木は今も姿はらず  
 弘前の桜の下にて食うべたる「半ぶんこ」なるゆべしや 汝は  
 人影の絶えし桜の下道を時のみが往くただしつとつと  
 老人用「おぼんざい弁当」日替りに売り出す店や身近にあらな

牧雄彦

畝傍山

・大

人のゐる墓地の片隅ひそと咲くウグヒスカグラ今日見つけたり  
 きざきざと高層ビルの影並び黄砂にけふるゆふべとなりぬ  
 絶え間なく風唸る夜を目覚めぬてもはや会ひ得ぬ人をしおもふ  
 川の面に張り出し伸ぶるセンタンの黄の実がゆふへの光吸ひゐる  
 新型のコロナウイルス蔓延しけふの神宮しづかなりけり  
 本殿の屋根のそがひに黒くるとおはすは畝傍の山夕づける  
 久に会ふ人と歩める神域の砂利踏む音は春浅き音

松浦禎子

今日の公園

・羊

三密のなき公園にたどりつき青葉ふくらむ山上仰ぐ  
 ととのわぬ鶯の声も身にしみるコロナ禍に沈む街をすききて  
 かわせみが営巣してます迂回をとコロナ禍中の今日の公園  
 命の選択止むなしというコロナ禍をいすこよりの声こたまのごとく  
 山上の竹林をさわに透りゆく風あり今日は釈迦誕生日  
 竹林より流れきたりし花びらを衣にまとわせて山より帰る  
 あめんぼの浮く水面をかいつぷりでんぐり返って消えてしまいいぬ

松永智子

鴉

・風

ものいはぬひとひの終りゆくりなく燃えつつ沈む落日に会ふ  
 四月の終りの日なり太陽のいま沈みたり燃えながらなり  
 昼ふかく衝の音のふとも絶え流れゆく雲高くしとほし  
 人の声ものの音のしづかなる三日つづきの休日の昼  
 音のなくうごくものなくしづもれる衝の間を行くひとのかけ  
 休日の衝に人の声とほく車の音の間遠にきこゆ  
 にんげんの声物の音いまだなく明けゆく空の一羽の鴉

三浦好博

こ無事で

・銚

「こ無事で」と歌友のメールの結びなりコロナ禍に死者増える今日を  
 寅さんと同業者の声胸を刺す「コロナで死ぬか飢ゑで死ぬかだ」  
 指導者に我らの生死が左右されるあの戦争とこのコロナ禍と  
 数万頭数十万羽の処分あり崇りはあらずと君は言へども  
 生死まで委ねる事とは知らざり幸辛相違ひしは我らなれども  
 顰蹙を買ふやうな事ばかりしてつひに漢字が書けるぞ書ける  
 究極はやまゆり園の植松にて小さき植松に我も連なる

三木まり

白

・昴

柿わかば光る朝の風を追ひ明日の私を探しに行こう  
 後悔も愛いもここに置いて行く 窓からの光 眉ひと息に  
 緑、風、光る季節に蝶ひらり肩に止まった 白い布干す  
 白い布を両手いっぱい掲げ干す空行く雲の風の速さよ  
 空高く一機飛び行き音とおく飛行機雲が西へと伸びる  
 いっせいに蛙鳴きだす薄曇り浅いみどりの紫陽花が揺れ  
 揺れ揺れる額あじさいの花の陰あまがえる眼を閉じたまま鳴く

## 宮本靖彦

コロナウィルス禍

・凌

バベルの塔崩れし教へ忘れ果てし虚栄の街に降るウィルス禍  
花見なき今年の桜ウィルスの所為か知らねど満開ながし  
自然ルール無視人類への報復かコロナウィルスに治療薬なし  
花水木薄紅と白盛りなりコロナにあへく街を慰む  
客のなき座席に向かひ南光の明るき視線訳なく  
我が世代に最後の禍難か戦争飢ゑ震災コロナあとは知らずも  
終活をたまりし歌になすべきを老いの冗歌の尚ふえてゆく

## 三好聖三

静謐

・伊

家の外は風つよくして忽ちにさくら吹雪という有り様に遭う  
菜の花のほとりの卯月妻と来て絹サヤを摘み水ぶきを摘む  
陽にひかる雨の最中を駆けてきて子連れ猫は息を吐きたり  
丸刈りの父に従う江ノ島の手漕ぎボートはゆるやかに揺れ  
そのむかし人と歩みし伊勢の宮〈静謐〉という時をいただく  
後統の船に抜かれてゆく船の濁れる赤き船体がある  
発動機はげしく錆びて〈もの〉となる雪の群峰背景にして

## 御代田澄江

九年目に想ふ

・茨

三・一一 九年目なりはや抜くるかに真青なる空静かに祈る  
県社協と石塚観光共催のバスにて通ひき震災瓦礫撤去のボランティア  
午前三時起き四時の出発松島海岸掘り出だす家の残骸衣服も砂中より  
幾度か通ひしルートの大川小学校津波受けし校舎は震災遺構となる  
「被災地へ人々運び九年に暮」との新聞記事に想ひ蘇る  
真夜目醒め満月眺む円かなる月真東の中空に輝る  
密閉密集室避けよ緊急事態とコロナは瞬時に世を一変す

## 茂木

斌

銭屋五兵衛

・埼

北前船に財をなしたる銭五と銭屋五兵衛の古希の句を知る  
初句二句目読めぬ五兵衛のくつし文字下五の句だけ「古希清水」なり  
「這ひのぼれ齢たのしや古希清水」銭五の古希に詠みし句ぞこれ  
記念館に読めぬ銭五の句を問へばかく教へられ思ひを解く  
亀巢なる雅号に古希の句を詠みし銭五のあはれ獄中の死よ  
去年の日は筒咲きの花よくつけし銀閣寺赤ヤブ今年は咲かず  
予定せし四月の旅も消えました惜しも悔しもコロナに勝てず

## もとむらしげと

リモート授業

・そ

送る子は代表ひとり 寂しさに満たされてゆく「蛍の光」  
いねむりの子すら懐かし授業せぬ一月が過ぐコロナの春は  
一年中マスクしている不登校の子が目立たない春の教室  
マスクより覗く目尻の動きにて子らがあらわす喜び不満  
見つめる子らの姿を目に浮かべ助動詞語るリモート授業  
子らの居ぬ教室に古文読みゆけり春の雪ふる静けさに似て  
子らの押す「見ました」の数ふえゆくを楽しみとせり朝の床にて

## 八乙女由朗

白鳥事件(2)

・柴

白鳥狩りせんと過ぎゆく官軍の兵士らみれば湧き立つ怒り  
雑魚捕りを止めし四人は二手に分けて鉄砲得んと民家を探しぬ  
神次郎部落佐藤家より借りし鉄砲を亀之進と玉蔵が待ちて追いたり  
豊之進、良治の二名は中名主今野家へ参るも銃借りられず  
銃持てる組は船岡大沼を探せど彼等の去りし後なり  
西小坂の舟場に追いつが舟発ちしあとにて撃つを亀之進が留む  
阿武隈川渡り屯所へ去りゆくを玉蔵は怨念の一発撃てり

## 山下 雅子

さくら

・習

ひるがえりひらひら闇を舞いながらさくらはんなりと地に還りゆく  
花ぐもりのあさ院庭に咲き揃うさくらのめぐりしんと動かず  
緊急の宣言ありてあたふたせる今宵スーパームーンに照らさる  
ひともの桜に映ゆる満月をピンクムーンと地元の人  
岡山にずしり根を張り枝を張る醍醐桜の樹齡は千年  
人気なき夜をひらひらとさくら舞うそのひとときの風を見ており  
さみどりにふくらむ葉桜ゆれ始む予報どおりの風か止まざり

## 山野 幸司

道

・沖

わが土地の道掘り返す汗流れ韓ドランの声浮かびて消ゆる  
樹々の間に光まぶしむ道造る時間と競う若葉の香り  
空仰ぐ月を十字に飛行雲夕陽しばらく止まりていん  
工事する我がめぐり駆くる子の未来道を固める機械の響き  
コンコンとコケラの渡るクヌギからはらはりの陽のこそばゆき  
今も又伝染病に苦しめられ人の歴史を身近に感ず  
楽園の地上に生きし者らの叛乱なるべしコロナウイルス

## 横田 敏子

母の筆筒

・福

明治生まれの母の使いし桐筆筒時をとどめて色褪せにけり  
ひそやかな匂い立ちきて懐かしき時間のひそむ母の筆筒は  
オリンピック一色となるはずだった日本の春コロナに消さる  
この次にいかなる災い来ようと腹を括りぬ覚悟は出来た  
新しき朝の光のさす庭に瑞々と淡き牡丹ひらきぬ  
水替えてパン屑撒きて鳥を待つ久しぶりなる日本晴れなり  
散歩にと出でし夕への公園にだあれもおらぬブランコを漕ぐ

## 吉永 惟昭

今ぞいま

・熊

馴染みたるインクの色を変えなければ万年筆も替えて歌詠む  
今ぞいま医・薬業界代表の本田顕子ぞ国救うべし  
こんな禍が来るなぞ知らで顕子嬢 貴女を参議に選んでよかつた  
細かるも重き荷背負いし君が肩 薬師如來も乗り移るらん  
全能の神と思いいし日の本の科学遅々たり犬猿の群  
薫風に浮きし我が身の検診日体重六十キロを割りしも  
漕ぎ着けし八十八歳被爆妻 義父母に言いわけ位はたつたか

## 朝井 恭子

春一番

・森

細き茎に丸き頭をのせ葱坊主たずきなく立つ春風の中  
いわれなき春の愁いを飛ばすごと東南の風ひと日を荒ぶ  
半島を荒々と吹く春一番わが胸底の虚にも鳴れり  
皆を決して生きる性もたず風あらば風に流されてもみん  
寄る辺なき心のままに独り言つ「憂患なきは人にてあらず」  
迷い犬探す手書きのポスターの文字滲ませて春の雨降る  
春の畑鋤きいし男つと屈み手に握りしむか黒き土を

## 磯田 ひさ子

やまぼふし

・森

枝先にみどりの兆し葉をひらくやまぼふしの樹あさゆふ眺む  
コロナ禍に籠る日にやまぼふしのはつかななる伸びわれを励ます  
いつよりかひそかに定むやまぼふしは加藤さんの木 香川先生の樹  
やまぼふしの一伍一什見届けむけふさみどりの茎の立ちたり  
幼らと指切りげんまん 八重桜咲いたら朝顔の種を蒔かうよ  
休校の長きに倦める幼らが声を張りあげ土掘り返す  
朝顔の種のベッドをふかふかにせむと幼ら土をほぐしぬ

## 市原 志郎

初夏

・萬

木香薔薇ゆらす風あり初夏めいた天気予報を聞きている時  
山より吹く風などは無きこの街に曾ては郭公啼きていたるに  
止まり居る自動車の屋根に反射する光はいつか初夏となりたり  
風の音春から夏へ変わりゆくを感じて居たり遅く起きた日  
ウイルスの事ばかりなるニュースなり真昼間に見るテレビ画面は  
子供の日母の日の後父の日がや々と出て来てようやく和む  
子が積める石の音する窓際によく初夏が訪れたらしい

## 市原 やよひ

ばらの花

・萬

勝れたる科学者あまた居るものを統べる人なきこのコロナ禍に  
ひと声が国の頭脳集めると今日もテレビは言いつつ終わる  
もしやその命助かりしものなるかコロナ死亡者発表の時  
棒グラフの山をテレビは指し示すコロナウイルス頂上知らず  
ばらの花チューリップの花藤の花切り取られゆくコロナのために  
穏やかな五月の空を横切れる飛行機雲は人影を見ず  
前の家の壁一面のばらの花コロナウイルス知らぬ如くに

## 大 浪 美 雪

卵 型

・森

冬の間を自前の乾葉かつばのもしやもしやに守られてこしあやめの新芽  
落葉のなか細長き葉の春蘭は淡きみどりに地に低く咲く  
卵型に長き耳もつ花春蘭幼の好める怪獣に似る  
ウイルスに挫けかけたる心身に春のがみのルッコラサラダ  
蒸しあげたる新玉葱と人参を合わせて食みぬ桜羹と  
啓蟄に目覚めたる蚊か丑三つに襲いきたりぬつぶしそこねたり  
指先の少しく寒き春の日に手編みのレースの手袋の欲し

## 奥 田 陽 子

くれない

・羊

ただ春とたわむれるらし枝垂枝に揺れつつ鳥の蜜に満たされ  
早咲きの紅あざやかな花に来て蜜をもとむる鳥鳴きかわす  
かく急ぎひらけるさくら寂しみて流るる水の音と歩めり  
雪降りてしだるる桜うす紅をにじませ咲けりこおれるごとく  
窓ガラスうすくれないに染むる季を過ぎて素早く茂りゆく日日  
階段を下りつつふと見上げたりスーパームーンいきなりの出会い  
ひとりにて言葉をかわずなき日日に口も廻らず ぼつんと言えり

## 小 野 雅 子

クロスワード

・羊

黄の看板、見覚えのある駐車場が店四軒の跡地に出来ぬ  
空暗れて誰も歩かず駐車場の饑ゆるるのみ外出自粛  
いつまでかかつてても良い自粛の日クロスワードは早く解けたり  
わが父母と祖父母の名とをきいてくるローマ字で打つ練習のため  
久々にミシンとり出しマスク縫ふガーゼは縫ひ直しが出来ず  
持つてみて軽いキャベツを選びきぬ「舌切雀」のお爺さんのやうに  
素朴なるドーナツが好きカラフルな中より選ぶ「オールドファッション」

## 神 田 鈴 子

花冷えの日々

・大

日を追ひて拡大を増すコロナ禍の街を彩りさくら咲き満つ  
コロナ禍に生活奪はれ苦しめる人ら増えゆく花冷えの日々  
春めける街に人影消え失せて無人島のごとき閑けさ  
外出を控へひっそり散歩する芽吹き初めたる銀杏並木を  
感染の恐怖はあらむわが身捨て患者診る人、看護する人  
宣言より二週間過ぎ今もなほ衰へ見せぬウイルスの影  
歌会も集ひも中止となりし今むなしさ埋めむ花の苗買ふ

菊地 栄子 文

・ 湾

寒き日は籠もる他なきひそけさに由無し事が入れ替わり頭つ  
岳山の麓をかくす白き鶴早や巡り立つとき真さやかに  
彼岸西風きようだい四人うち揃い語らいはずみし父母の家  
裾長きコートをはおり荷を持てる女は直ちに眠り始めぬ  
スマートフォン見入る少女は今し方バス停周りの屑拾い居り  
右ひだり並べ置き読む唐突なあなたの文の本心どちら  
限りある時間であれば恨めしきわたしのうつつ乱しくる文

木村 文子

春の日々

・ 羊

無防備にいでたるわれに待ち針のように細かな雨が降りくる  
汚水栓に金魚の模様が穿たれて 踏まないように雨の日なれば  
芽吹くものまだなく木々は眠りおり雨を静かに受けとめながら  
うっすらと陽の射す午後なり下校する子らの声なく黄の傘もなく  
信号は規則正しく変わりゆく五回を待ってひとりりで渡る  
芽吹くもの春の日ざしにゆるみゆく枝先ほつほつ赤味を帯びる  
汚水栓の金魚模様をそと踏めば深き流れが確かにありて

草刈 十郎

花筏

・ 世

まだ見たき夢の残れる眼裏に惜しき目覚めの春の朝かな  
春寒やコロナウイルス禍にいつまで続く日本の休校  
休校の相次ぎ生徒不在なる校庭の桜まさに満開  
木蓮は空の青さのなかに咲き地には囁り命満ち満ち  
春うららコロナウイルス浮遊して人奪はれし桜なりけり  
花びらも水もほほゑむ花筏鯉のいたづら整はざりき  
なにもかも延期中止と何もなし背なを丸めてひとり酒酌む

國井 節子

昭和の日

・ 春

わが生れし昭和の日の空晴れわたるされども暗しコロナ居座り  
誰も来ぬ誕生日の朝とほく住む娘よりメールと花の宅急便  
ウイルスに負けてならじとけんめいに針に糸通しマスク縫ひをり  
水分の補給忘れず飲むやうにと友のメールの温かさかな  
ああ口惜しこんな静かな春の日のこんな空に空しどこにも行けず  
知り合ひの大工の棟梁仕事無く社員抱へて如何にか居らむ  
もの忘れ認知症かも迂闊にも私のミスの多きこのころ

河野 繁子

春耕

・ 雁

朝の田に白さまぶしく白鷺の羽をひろげて舞う一羽おり  
やや数をふやすはたのし春耕の田に降りつどう中驚三羽  
桜ふぶきあびつつ一球打ちあげる遠くの遠くに飛べよウイルス  
家ごとに緊急放送よる流れ家を出るなと鎖のかかる  
この柄は孫に婿にとマスク縫い暮るるの早し糸くず払う  
うたつくれマスク縫わなと心せき家にこもりて一刻おしむ  
のろのろと二人暮らすを様子見の娘に手をあげるガラスへだてて

小西 美智子

籠る

・ 大

コロナ禍に籠れるうちに散りゆけるさくらを追いて咲くはなみずき  
疫病のはやりし都のありようをいまさらながらしのぶ古典に  
「地震で大地震です」という携帯の警告に覚め眠りの浅し  
葛蒲の葉もとめぬままに日も暮れぬ籠りておれば月日のうすれ  
岩合光昭映すピクトリアの猫たちののびのび暮す姿のまぶし  
届きたる甘夏に添えし枝葉には点々と白くつぼみ生きおり  
雪月花愛でたる古人をうべなえりきよらに地球を照らす満月

## 小林能子

マスク

・羊

待たれたる花の季節にマレーシアの友の訃報を糺す術なく  
 新型ウイルス感染死者の数重く蘇る「東部軍管区情報」  
 ケーベル博士をこの横浜に留めしも帰国前夜の大戦勃発  
 里帰りの友とトリベルクに待つひとの空を制するコロナといふ敵  
 北京からマスク二〇〇枚 縁あればその一枚を掌に享く  
 ベトナムの元奨学生より便りあり布マスクを一枚添へて  
 かなしきも不安も薄き不織布のマスクに被ひ病院へ行く

## 近藤栄昭

若布

・虹

波静か小舟は竿立て沈めゆく若芽の口開け日本海五月  
 絢いゆるめわかめ挟んでピンと張る砂利に一筋海水滴る  
 干されいて風に吹かれる干しわかめ帰る海なくフラフラ乾く  
 稀に着く芽カブに湯通し飯に載せぐるぐる回してトトロご飯  
 改札で受け取る佐渡の干しわかめ姉との間に浜風通る  
 干しわかめ生産地名は佐渡石花与ひょうとつうの出会いし所  
 武蔵野の水に膨らむ佐渡わかめ手鍋にたっぷり厚揚げも入り

## 近藤芳仙

令和二年春

・信

新型のコロナウイルスと闘へば花を散らして桜はあれたり  
 残雪の美ヶ原をふく風もとほく武漢のコロナ想はず  
 他人事と落ち着く日は短くて緊急事態宣言の出る  
 「海外の都市封鎖とは違ひます」冷静なるを要求されて  
 スーパーのレジに並ぶも二メートルコロナコロナと唱へて立てり  
 「県境こえて移動はせぬやうに」ウイルス保菌者見えない恐れ  
 ゴールデンウィークと呼ぶこの休みホームステイウィークと言ひ替へられて

## 久我田鶴子

てなづける

・羊

会ひたいね会つて話して笑ひたい〈濃厚接触〉だったのかそれは  
 エンブレインのともる朝からをブスブス言つてゐるのはわたしだ  
 かぶさつてきた雨雲を傘として濡るるを待てり地上にわれら  
 強風にけふは黄砂が飛んでくるなにかより増と言ひかけし唇  
 二羽たまに三羽となりて雀くる 関係といふを考へてゐる  
 てなづけてしまふもひとつか新コロと呼ぶにいさか抵抗あれど  
 〈二列目の人生〉を言ひていねいな仕事を遺す池内紀

## ● 支社だより ●

・昂グループ

榎垣美保子

金近敦子歌集『東から西に』が、令和元年度広島県歌人  
 協会奨励賞を受賞しました。

・大阪支社

高尾 恭子

五月三十一日(日)、三ヶ月ぶりに歌会をおこないました。  
 予想以上の十二名が参加。部屋のドアや窓を開け、椅子  
 の間隔も広くとつての歌会でしたが、楽しかったです。

## 桃原邑子 自作を語る

歌集『沖繩』を出版した翌年に、NHK第2ラジオの番組「詩による自叙伝」で桃原邑子が自作について語ったものです。仲西正子さんから録音テープを借りてテープ起こしをし、聞き取りにくかった部分を仲西さんに確認してもらいました。桃原邑子の話しぶりを伝えるために、ほぼそのままのかたちを残しました。著作権継承者の桃原良次氏の了承を得ての掲載です。（久我）

あのー、何十年前でしようか。私が少女の頃です。満で言え、十二歳ですね。私は女学校の一年生でした。故郷から八里も離れておりましたから下宿していたのです。そしたらね、国語の時にね、初めて古典が出てきたわけです。それがもう、沖繩の者にとっては、この古典ですね、古今集とか、ですね、新古今集というの、もう一つの驚きですよ。言葉が沖繩の方では、琉歌と言ってですね、八八八六の三十音の偶数でだけれども、五七五七七という、その三十一音のね、韻律のね、その素晴らしいのに、まず驚いたわけです。それでもう、とっても胸が燃えたわけです、少女ながら。それで、その国語の本で出会ったのが、藤原定家の「見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮れ」という歌ですよ。ああ、素晴らしいと言って、何度も読み返しておりましたら、ちょうどその翌日のことです。新聞、来ました。「琉球新報」という新聞ですけれども、それ

見たらですね、内地から、いわゆるヤマトからです。釈迦空とあってですね、折口信夫先生が、そのー、沖繩においでたとあったですよ。ハッと新聞に飛びついたので。はあ、これがあの短歌の先生なんだって。今日は自分の歌を見せに行こうかと、そう自分で決めたわけです。それで、国語の本に出た歌を丸写しして、そして、それを自分で作ったよって言って、それを持って行くわけです。あんまりそのまま持ってたからおかしいから、よし、と「秋の夕暮れ」を「夏の夕暮れ」に直したんですよ。その時は私、知りませんでしたけれども、この釈迦先生は、とっても女嫌いで、とうとう結婚もしなさらなかったらしいんですけれど。ちょうど廊下に出ておられました。逍空先生は、それは恐ろしいような顔をしていますけれども、歌を見てもらいに来ましたと言ったら、どれどれと言って、その紙切れを受け取ったわけ。そしたらね、あの大先生がね、その、古今集のことを

知らないはずはありませんでしよ、しかも藤原定家の歌ですから。けれども、あの先生は何ともおっしゃらないで、「あなたは数学が好きですね」とおっしゃったんです。「1+1は何ですか」って聞かれるから、「あー、2です」って。そしたら、「10+10は」と聞かれるから、私は「20です」と答えました。そしたら、「はは、なるほどね」と。「歌をやったらね、あなたは将来はね、苦しむことになるから、歌はせんほうがいいですよ」と。「『浦の苦屋』なんて言ってね、とっつてもうら寂しいところを詠んでいますね」って。「だからね、『秋の夕暮れ』だったら良かったんですが」って、おっしゃったわけですよ。(笑) 私はなんとかして褒められると思って汗だくで行ったのに、数学の勉強でもしなさいとおっしゃった。もう泣く泣く帰ったわけですよ。道道、考えました。あの先生はね、お前は駄目だ、後で苦しむよっておっしゃったけれども、作ってみんことにはわからんでしょうが。初めからそんなね、駄目っておっしゃることはおかしいって。それで作ってみたいことにはわからんなああと残念ながら家に帰ったわけです。しばらくしたら、夏休みになりました。私は自分の故郷に帰りました。勝連半島です。そしたら、自分の家の隣に、ちょうど瀬見島の七校というのがあって、そのの教授をしている新屋敷幸繁<sup>ニギハヤヒ</sup>という先生が夏休みで帰っておられたわけです。そこに遊びに行きましたら、テーブルの上に「日本文学」という本が置いてありました。ぱらっと開けてみますと、短歌の投稿欄があるわけです。よし、私は、作ってみようって。そしてね、作ったのでね、めちやくくちに。その原稿を送りました。一ヶ月くらいして、もう学校は始まっていたんですけども、この雑誌が送られてきました。なんと自分の歌が載っているではありませんか。しか

も特選ですよ。第一号で。で、その先生が、選者の先生がね、阪口保って先生でしてね、載せてあるですからね、ものすごい喜んだわけですよ。それからもう毎日、歌ばかり作りますよ。(笑) 一ヶ月に百くらい作りましたよ。

—— 桃原邑子さんは、一九二二年、明治四十五年三月四日、沖繩の中頭郡与那城に生まれました。今年、七十四歳です。ひめゆり部隊で有名な沖繩県立高女から沖繩女子師範を卒業、琉球王朝士族の末裔である夫との間に三人の男子をもうけました。短歌は前田夕暮に師事。「詩歌」に投稿して腕を磨きました。昭和二十八年から「地中海」同人となり、今日までおよそ三十五年間無欠詠、つまり、一度も休むことなく歌を詠みつづけています。

- ・ かくにかくに一喜一憂する児等に主観おほかたの行動表渡す
- ・ 体操場に出づれば一斉にわめきつつ児等と教師と一瞬を笑む
- ・ 思想などどうでもよろしと自衛官となりし教へ子われを訪ひ来る
- ・ いまのわがすべてを賭けてたちむかふと言へば大げさか教室に入る

戦争に追われてですね、昭和二十一年の五月にここに来ました。六畳くらいの部屋に十二人、家族がいるんですから、もう寝る場所もないんです。なんとかして、どっかなんかないかなあって、県庁をお願いに行っただけですよ。教員になりたいけれど。そしたら、その県庁の人が、熊本県では「三あ」って言うんです、天草郡・阿蘇郡・葦北郡と、そこに行く人は



いない、と。けれどもまあ、住宅がある所がいいと言うから、その住宅があるのが葦北郡の田浦ってところだ、って。「ああもう、ようございます、そこで。」って、それで来たんですよ。

その一、来たのが昭和二十一年五月です。そしたらもう、田浦に来たらもう大変です。来た学校がですね、ものすごい山の奥ですよ。沖繩でもちょっとあんな所ありませんね。それで、そこで夫婦で教員して、あの一、うちの主人が一、二年生もって、私が三、四年生を受け持つというふうにして、山の中の学校に六年ほどおりました。まあ、ここに来て、生活の違いはありましたけれども、やっぱり戦争の悲しみから逃れたくてですね、ここに来ました。

——昭和四十二年に『夜光時計』、昭和五十四年に『水の歌』と、二つの歌集を世に出しますが、これらはいずれも相聞風の恋の歌が中心になっています。

・別れてなほかけめぐる身のほてり鎮むると浴ぶるシャワーの熱く

・白樺の幹を目かくしに抱かるるを羞し雪野のものの匂ひの  
・覚めし今もわれは夜叉なる夢に見し汝が美しき妻を妬みて  
・共に死ぬと入り来し樹海に月明の及べばひるむ汝が眼を見たり

・嘘の愛と知りつつ汝れに寄りてゆくわれのパジャマの膝かわくとき

・触るるのみを愛と呼ぶかやわれを残し宿出づ汝が路地に手を振る

・その妻に今宵嗅がれむ汝が背の草の匂ひはわが背にもして  
・ここらとはうらはらの傾斜なしてゆく胸ゆゑまなこ開けて

はならぬ

・わがまへに不意におろさる遮断機よこのまま終る愛なるべしや

皆、会う人ごとにね、あれ本当なの、桃原さん、って聞くからね。あれ、嘘と思うなら下手ね、と私は言うの。あれ、本当よって言うの。あれ、嘘と感じるなら下手ねと私は言うの、答えは。そうかなあと、まじめに・・・(大笑) だからね、歌が芸術であるためには、あの、その、事実って言うのがおかしいんですよ。歌が事実しか詠わないのであれば、芸術・文学たえなないと私は思います。読んで、これ本当かなと感じるなら、その歌が下手ということである。本当と感じたら本当と受け取ったらいんですよ。あの、笑うんですよ。方言で言いますと、「歌つくやーはフラー」って。「一銭貸すにもならんものを」と。わかります？ 方言で。私もそう思いますけど。大事なことが、これが何と言いますかね、人を愛し、人に愛されるために歌を作るっていうのが私です。私、歌は、歌だけはお金が要らない、と。つまり、あの、習字ならっても、お花ならっても、お茶ならっても、月謝要りますね。月謝要らないのが歌と申すんです、私は。一銭にもならない、だからね、つまりね、「フラー」ですよ。(笑)

※フラー…気のふれた者。また馬鹿者。(沖繩語辞典)

——あの、望郷の念のようなものは？

それがあるから、沖繩の歌を歌いつづけております、はい。兄弟はみな、向こうにおりますから。沖繩はね、あの一、基地

さえなければですね、本当に素晴らしいところでですね。あの、「昔、沖繩」と、歌集の中でも詠んでいますけれども、カライモの雑炊を啜り、米の飯、銀飯を食えなくてもですね、あんなのんびりした所、ありませんよ。しかもですね、日本一の長寿県ですね。日本は世界一の長寿国ですから、沖繩は世界一の長寿県となるんですよ。それは何故かと言いますとね、人間同士が温め合っているから。お昼頃にごめんくださいと行ってごらんさい。お昼頃に来た人が、自分は食べなくてもその人にご飯を食べさせる習慣で。武器持たぬ国が一つだけある。これが琉球王国と。だから、武器の代わりに空手というのがあるんですよ。ね、その、城があるわけですね。城と城と喧嘩し合うわけですよ。戦するんですよ。ところが、武器がないですからね、石を投げ合うわけ。今帰仁の城に行きますとね、石が積んであります。小さな石が、石垣なして、それが武器ですよ。しかも、その石はね、丸く研いであるんですよ。丸くこすって、つまり、敵に向かって投げられるけれども、ああ、死ななくてくれ、と。行っても死ぬほどのことはないでくれということが、あれには籠められているということ、今帰仁城の石、丸みを帯びている。そういうようなのが、沖繩の心なんです。

- ・まどひたる黒絹のなかに保ちある体位よ哀れ骨の母なる
- ・とこしへの土に還さむ母の骨溜ぎの水に浮けるかなしも
- ・若き日のましるき腿を支へたる骨よ肉ほど白くはあらぬ
- ・濯ぎ水に沈めし母のうす背き眼窩に終の空映さしめたる
- ・われを打ちし母の手指の骨のあひ海はすつほり嵌まりてゐたり

- ・十人の子に分かちたる愛紡げ壘に整ふる母の骨鳴る
- ・丹念にわれに洗はるる骨の母鳴りつつ哀しも骨肉といふは
- ・にんげんの果てのさみしさからからと母の洗骨厨子壘に鳴る

・まことここは無の世界なる死の順に並べる壘の骨乾きつつ人が死にましたら、最もその人が一番大事にしていた着物を着せます。そして、墓の中の入り口の方に、高いテーブルの高さくらいの置物があつて、墓を閉めますね、置いて。そして、四年間はその墓を開けることできません。そして、四年過ぎましたら、その墓を開けて、そして、そのお骨を、つまり、棺ごとに出してきます。外に、骨をです、海の近くですと海水、陸の近くですと泉の水をいっぱい汲んできて、一つ一つきれいに洗うんですよ。親族の者が集まって。そして、あの一、厨子壘と言つてですね、壘の中に足から順に入れて、泡盛、あれは消毒のつもりでしょうか。あれ、振りかけて、そして、墓の一番奥の方に死んだ人の順に納めます。戦争中は、その墓が壊ですよ。戦争中は墓ん中が壊です。防空壕になったわけですよ。それでも、先祖の骨と一緒にほとんどの人が暮らしています。だから、骨を取り合い、投げ合つて、遊んでたわけですよ。アメリカの兵隊さんなんかは、あの厨子が芸術的と言いますかね、お骨をひっくり返して捨てて、厨子壘を盗んでいくのがいっぱいありましたよ。部隊の横に置いてね、雨を溜めてね、それで顔を洗つておりましたよ。

——桃原邑子さんの歌集『沖繩』には、戦後四十年間に詠んだ戦争の歌一万首の中から、昭和五十四年以降の五二八首が選ば

れています。同人誌「地中海」に初めて沖繩の歌を発表したのが昭和五十四年の夏。それまでの三十数年、ひたすら恋の歌を作ることによって紛らわしてきたという、この人の傷心沈黙とはいったい何だったのでしょうか。

桃原家の長男・良太君は、昭和二十年四月、中学校二年生の始業式に、三式戦闘機と言われた特攻機が落下したその下敷きとなつて、無惨にも殺されました。その時は心が空っぽになつてしまつたと桃原さんは言います。

「私は沖繩人です。沖繩にとつて一番ひどいことは、あの戦争の戦場となつたことでした。私はその沖繩のみんなの人の悲しみが詠み込まれたのです。けれども非力な私は、その限界をも思い知らされました。(中略)昭和二十三年頃、九州のある歌誌に戦争の歌を送つたら、戦争は歌にはならないと言つて載せてはくれなかつたのを覚えております、その否定した理由もわかるような気がしました。戦争の歌は単なる報告に過ぎない場合が多いからです。私の歌もそのこたぶんにもれないのかも知れません。一方、わが子の無惨な死の歌をひとの前に晒したくないという思いもありました。それで戦後三十年間ほど相聞風な歌を作る事によつて、その悲しみから逃げようとしてきたのでした。」(歌集「あとがき」より)

- ・ さながらに無人の島となりきたり上陸したる米兵五十四万
- ・ みるみるに飛行場を作り道を通じ銃座をかまふるにわれら何を為さむ
- ・ 男とも女ともわかず黒く焦げ転がる野のみち燐の匂ふも
- ・ のたうちてあげし声やがて肉焼くる音に変はりてひとは死にゆく
- ・ 兵たちには名譽の戦死島人には何の死ならむこの屍しなばよ

私自身、長いこと誰にも話してきませんでした、はい。やっぱりしたら思い出しますからね。なるべくは、この一、紛らすために、つまりは自分で自分に言い聞かしてゐるんですけども、今まで人には見せなかつたこの笑顔もふりまくわけです。ああ、よしと、子の分まで私は笑顔をふりまくぞと。早く死ぬという子どもはねー、やっぱり違ふのかなとも思いますね。他の二人に言うとは品肩してと見るのかもしれないですけども、何ひとつ反抗しなかつたですね。そして、一番頭が良かった、優しくてですね。昭和二十年の四月一日です、死んだのが。米軍上陸の日です。四月一日ですからね、入学式ですよ。ちょうど二年生になつた日ですよ。午後の四時過ぎですね。死んだと言いますけどね、とっても信じられませんよ。今さっきまで一緒でしたからね。だから、手も足も無いでもいいと、ダルマのようでもいいって、私が生涯おんぶしてね、あんたと一緒に生きていくからというあれで、そこまで行きました。

- ・ 制服のちぎれの血の染む名札標・中二・O型・桃原良太
- ・ O型の血潮のすべてを地は吸へりこのばらばらはわが生みし子や
- ・ 顔裂かれ子は死にたれば眼の下にありし黒子も見むに術なし
- ・ 足のみは完けくありし子を納るる棺には破れしズックの靴も
- ・ 今朝をわが切りてやりたる指の爪見れば紛れなき吾子のばらばら
- ・ 縫ひつけし名札の子の名の文字除け上衣にしぶきし血糊見

るかな

- ・身を裂かれ死ねるを焼きし子の骨を拾ふちりちり時過ぎにけり
- ・子の通夜を誰か歌へる「海ゆかば」「君が代」「はやぶさ」の歌かすれゆく
- ・死にし子のポケットにある黒砂糖けふの三時のおやつなりしを
- ・還り来し夫のおだしきひげづらを見つつ子の死を告げやらめやも
- ・肉裂けし子ともるともに燃え尽きよわがうつせみの母といふ名の
- ・流線の機首美しき三式戦のわが子の良太を切り裂きにたり声あぐる間なく死にたる子の声か島をめぐりてきこゆ海鳴り
- ・戦争に死にし子のこと語るわが物語めく唇をかなしむ
- ・血の染みし帽子とシャツと子に関はるもの始末せむわが生ける日に
- ・子を殺めし特攻兵にわが見せし笑顔の嘘をとはに悲しめ
- ・いくさにて裂かれしからだ後生ごせいにて必ず直してあげるから子よ
- ・フォーギブ・バット・ノット・フォーゲット・めぐる子の

忌よ四月一日

そしてまもなく、四ヶ月すると、戦争終わり。だから、四ヶ月前に戦争が終わっていたならば死なないで済んだわけです、子も。三式戦のプロペラか機首で、ガツと来たわけですよ。

——それ、お子さんの他に何人が死んだわけですか？

あと、兵隊さんが一人。

——は？

兵隊さんが一人。その人はねえ、一、二時間ぐらい生きていましたよ。まあ、うちの子は良い方で、即死だから。兵隊は戦死です。民間人は何でもない。なんでもない、民間人ですから。なんでもない。戦争で死ぬのは何でもない。もう二十万人からの方が死んでいるんですからねえ。だから、この歌にも詠んでありますでしょ。「兵たちには名替の戦死島人には何の死ならむ」て歌ありますよ。

- ・洗骨せし子の骨今も匂ふなりわがふりかけし涙と泡盛
- ・子の血糊固きずぼんとシャツ濡り裂かれしからだのままに破れし

・死にし子の全身包帯巻かれつつどこかの画室の石膏の像

たとえばその、軍医の人が死亡診断書、書いたって歌あるんですよ。それ、何て書いてあるかって言ったらねえ、「顔部切断深部裂傷」という死亡診断書です。こういうのも歌に詠んであるでしょ、だから、このー、やっぱり酷いもんですからねえ、この歌、抜かしましたよ。それからね、死体からウジが湧きますね。このウジをね、ご飯と思うわけですよ。中には食べてます。お腹、みんな何も無いですから。けれどもね、そういうようなものはね、ちょっと、あんまり酷いですから。

- ・中学の二年になりし日昭和二十年四月一日子は死にける
- ・その朝ともに垂汁噺りたる子はその夕べ裂かれ死にき
- ・わが良太の四十年忌よ好みし西瓜店頭血のいろ抱け

・ 逝きし子のけふ五十歳の誕生日背広に替へやらむ学生服を

この歌集出でからですね、毎日、朝夕は自分の子どもに詫びております、ごめんねと。ここにありますが、仏壇は。あ、ごめんねと、皆から来ました手紙も必ず上げて、私の歌の友だちからよ、ごめんねと。おまえに恥かかすみたいだね、ごめんねと。毎朝、休むとき、詫びております。この前が、一月十五日は誕生日で、それで、五十五歳の誕生日です。生きておれば、だから歌集にもありますけども、「今日は学生服を背広に替へやらむ」って歌ありますね。死んだときの十三歳のままですけれども、心に描くのは、どういう人生を送っているんだらうっていう、その、大人になった姿しか浮かびませんね。生きていたんなら、どういう暮らしをしていたんかなあと、学校もどこを出たんかなあって、今頃どんな格好してるなあって。あのね、車とか車とか皆乗り回しているけれども、それも乗り回すこともない、見たことないで死んでいったなと。生きていたら、それも乗りおったなと、車の、ピカピカしたのに会うと、ああこの車かなと。(笑)このようなの乗ってたかねえって、思いいます。どんなお嫁さんが来たかかですね、はい。お嫁さんがいて、孫がいて、皆でね、テーブルを囲んではいしゃぐんかなってですね。

・ 土砂降りの雨に身の泥洗はせてうづくまりをり子は闇のなか  
 ・ くらやみの泥濁のなかうめく声きこゆれふりむかず逃げゆくために

・ まだ生きてこれの地獄を見よとてや雨あらなる弾われを

外れゆく

・ みんなみへ逃げゆきし人にはぐれたるわれと幼の生き残り  
 たり

・ この海の底ひ陸の地の底ひ層なすにんげんの化石を見むか  
 ・ 本土への侵攻ここにて食ひとめよたとひ沖繩みな亡ぶとも

またあのー、ほんとは私、カトリックですよ。だから、仏壇とかそういうのは無いんです、ほんとは。無いんですけど、あるんですよ。そこにいろんな人からの手紙を上げて、お菓子でも来たら上げて、話しかけています。そんな十三歳ぐらいで死なして、何ひとつ生まれたいが無いと、人のために尽くすこともなかったと。私が生き延びていて尽くさんといかんなくて。私にできることは何だろうか、いつも思います。「制服のちぎれの血の染む名札標・中二・O型・桃原良太」「O型の血潮のすべてを地は吸へりこのばらばらはわが生みし子や」「十死零生の特攻兵君が殺めしはわが子良太ぞ互みに哀し」なるべく話さないで、歌に話させようと思ったわけです。話したらもう終わりですから。特に、私の場合には子どもが死にました。相手の、その特攻兵の方は、どっかに生きておられて、だからね、その人の目になるべく触れなくてくれというのが私の望みです。私以上にキツイのかもしれない。辛いのもしれません。自分は死ななかつたのですから。それで、その場所とか、あるいはその様子なんかを知ったら、その人が気づくんじゃないかと思うわけです。

——「地中海」の香川進さんから、ある日、沖繩の歌はもうストップと言われました。いいえ、やめません、死ぬまで作りつ

づけます。それが桃原さんの答えてした。「息子の良三日く、『これが戦争に息子を惨死させた母親の歌か、なまぬるいなあ。愛情も悲しみも風化したとしか思えない。』嗚呼。」(歌集「あとがき」より)

今朝なんかは、二首ぐらいしか作りませんが、一日に二首としても、一万首あります。時には二十首も作ることもありますし、とにかく朝は四時に散歩に出ます。そしたら、その、行くときは二十分くらい歩くんです、浜辺を。その時に自分に課したノルマですけれどもね、朝四時に散歩に出たら二十分歩きますね、その間に歌を二首以上作る。それも、あの、たとえば、雪が降ったら雪の歌を作ろうというんじゃないです。必ず沖繩の歌を作る、というノルマを自分に課したわけです。ですから、下手であろうが、とにかくもう作って、うん、作りますね。作ります、行く時に。作りますと言ったからにはできるんですよ。そして、帰りに、自分の暗記する歌の、好きな人の歌を、暗記しながら帰るんです。そういうようにして続けてきたのが、ま、一万首どころじゃないですね。それで、その中から「地中海」に十二、三首ぐらいずつ発表しています。それもまた全部歌集になったわけではありません。香川先生は、酷いのは抜かせました。あんまり酷いのは。これは優しい方です。みんな、この歌集『沖繩』を、酷い、酷いと、二百人くらいから手紙来てますけれども、これ、酷くない方を選んでくださったわけですよ。そういうふう書き溜めたのが、あの、その、一万首余りとなっております。「子の通夜を誰か歌へる『海ゆかば』『君が代』『はやぶさ』の歌かすれゆく」「一瞬に爆ぜたるから見たおろしてをりしか子の魂うろたへながら」「死にし子のホ

ケットにある黒砂糖けふの三時のおやつなりしを」戦争の歌はストップっていうのは、皆、誤解してるんですけども、見たくないからという意味じゃないんですよ。その、歌集に、ストップした時に一冊の本にしようと思われたんですね。それで、こちら辺で歌集出したらどうだろうかなという気持ちだろうと私は解釈してるんですよ。それから先も、もうずうっとこれには沖繩の歌ばかりを、生きていかきりは詠むかなあと思います。あの、未来のことは分かりませんが、「廻り来し夫のおだしきひげづらを見つづ子の死を告げやらめやも」「フォーギブ・バット・ノット・フォーゲット・めぐる子の忌よ四月一日」許します、けれど忘れません、めぐる子の四月一日。将来は、もしゆるされたならば、第二、第三といって、「続」を出したいと思っております。うちの息子の良三の曰く、これが子どもを惨死させた母親の歌かって言いますけども、なるほどということも思います。酷いの、抜かしましたから。この歌集に対する、あの、その、反応ですね、歌を作らない人ばかりです。みんな、あの、歌を作らない人であるってことは、ビックリでした。それで、考えさせられましたのはね、歌ってのはね、皆の分かるもの、庶民のもの、一部の人が分かる歌もね、芸術的で良いのかもしれないけれど、やはりね、皆が分かってくれる歌がいいのかなあっていうのが、今度の歌集を出した感想です。私の。そしてまあ、ほとんどの人、若いのから年寄りまでいますけども、兵隊に行った人もたくさんおられますね。そして、自分は南京虐殺で人を殺しました、と。これを読んでも本当に悔いております、と。その親の気持ちも分からないで、自分は人を殺したんですよ、と。こう書いてきた方もおります。

昭和三十八年、夫を見送った桃原邑子さんは、現在、熊本県田浦に独り暮らしです。沖繩の新聞を定期購読し、二月の旧正月には必ず沖繩に戻ります。近くに住む三男・良三さんの娘たちが良い歌を作るのを楽しみに見えています。では、終わりに、最近の歌を読んでいただきます。

未亡人寡婦と呼ばれてこの自由見てよあなたが早く死ぬから

朝闇にわが踏み込みし水たまり夕べかすかひび割れ乾く

眼がかわき喉がかわき四肢かわくわが見る冬至の夕日の落

下

夜が明けて汚いものがみんな見え歌ができなくなりました

死者われの棺を覗くことなかれ一緒にゆきたくなるだらう

から

(注 あとの四首は歌集ほか未確認)



## 香川進の生きものの歌 21 田土 成彦

・ 蝙蝠のつばさ飛び交う夜のそらを陥ちくるものに神生れや  
ます 『山麓にて』より

蝙蝠と言えは、いま喧噪を極めている新型コロナウイルスの宿主といわれているが、その真相には深い霧がかかっているように思う。元来その形状、生態からしてあまり好感を持たれていない哺乳類ではないようだ。目を覆ってもその発する超音波で捕食し、障害物を見分ける。夜間行動が可能なのはその能力によるのだろう。チスイコウモリなどから連想されるドラキュラなど怪奇畏怖の対象でもある。

さて、歌のほうに戻って、都市部では彼らの居住場所が狭まってきたが農村部では出入りできる屋根裏などもまだあるのだろう。夜空を飛ぶコウモリは識別しづらい物ではあるが、彼らの出す排泄物が時として身に降りかかることがある。下句「神生れやます」という発想のとんでもなさはこの歌のメインの感動を呼ぶところだと思う。糞から神が生まれるのか。ところがあの古事記のなかにその場面がちゃんとあるのだ。イザナミが火の神のカグツチを産んで病み、吐瀉物や糞から神々が次々と生まれるシーンがある。一神教ではない我々の母体にはこの様な思考が横たわっているため、糞から生まれる神を実感として感じることができるとも知れない。なにも神代に限ったことではないと香川進は詠いあげているのだ。

## 今月の二人

### 今日も来ない

丹羽 哲也

早朝の飲食街の裏通り四人で帰る麻雀のあと

休日に仲間四人と待ち合わせ御宿沖おんじゅくでフゲ釣りをする

結婚式に名司会ぶりを発揮した友の能力改めて知る

二日後にゴルフの約束せし友はくも膜下出血で倒れしという

つり ゴルフ 麻雀もせし悪友は次なる遊び探しに逝きしか

出勤時会社近くの喫茶店いつも来る友 今日も来ない

じわじわと滲む悲しみ胸にわく帰りの電車吊革にぎる

若者の知恵を出し合い夢をみて創りし店は閉店となる

丸ちぎりマークを彫りし社員章しばらく見つめ握りしめたり

倒産後気持ちの整理やっつき社章を沼に投げたり「さよなら」

倒産を知らずに逝きしわが友はただそれだけは幸せと思う

我が城は姫路にあらす駅前の街中に建つ 廃墟となりて

子の頃に芋掘りに来し遠足は中央区立柏学園

### 同期の仲間

私は昭和四十四年、百貨店に就職致しました。初任地として神戸店勤務を命ぜられ、その同期は十五人でした。五年後、千葉県柏市へ転勤。神戸からは四人の同期が異動になりました。その後の経緯を今回、詠んでみました。会社はバブル崩壊後、民事再生法の適用を受け倒産。一万人以上の社員は五千人に減らされ、私も辞表を提出したのですが、目の前で破かれ再生作業を命ぜられました。残務処理は徹夜の連続で熾烈を極め、多くの仲間が病気で倒れたり亡くなりました。私も突然心臓のバイパス手術を受ける事になり、柏の同期四人は一人が倒産直前に、もう一人は倒産後に病気で亡くなり、三人目は今、癌と闘っています。私は六十三歳で退職し、お寺や区役所勤務を経て、現在マンションの管理人をしております。やっつと予算のない仕事に就き、短歌をつくる余裕が出来ました。最初「NHK短歌」への投稿を一年程し、昨年二月より「地中海」森の会に入会させて頂き、皆様の温かいご指導のもと、具体的表現の大切さを学んでいます。歌にすることによって改めて自分を見つめ直すことが出来ました。充実した歌会をありがたく楽しんでいます。



## 今月の二人

嵯峨野まで

久保 幸子

歩こうよわれに呼びかけ支度するリュックを背なに嵯峨野あたりへ  
心地良き風の冷たさ渡月橋渡れる下を水鳥の群れ

嵯峨野路は行き交う人の多けれど他国語ばかりここは何処か  
ゆうゆうと小倉の山に飛ぶ鳥見晴らし如何にと見上げて思う  
夕光に照り葉もみじのグラデーション語り尽くせぬその輝きは  
さまがわり築二百年の藁葺きにエスプレッソとパンを売る店  
そろそろと歩幅縮めて白鷺の獲物を狙うその真剣さ

もう一度思い直して身をかがめ再挑戦の驚いさましく  
くれなずみシルエットとなる嵐山きよらな瀬音聞きつつ歩む  
こころ込め手をかけやれば草花の応えて土の温もりのあり  
鮎豆茶煎れば手づくりのおだやかな香りに厨の包まれてゆく  
ひと仕事終えて一服点てし茶のひろがる甘みにこころ満たさる  
天高くひばり囀る晴れの空見あげつつ行く今で五千歩

### 短歌とのご縁

短歌にご縁をいただきましたのは田土才  
恵様の歌集『風のことづて』を拝読させて  
いただいた事がはじまりです。何とも優し  
く日々の出来事をこのように温かく見つめ  
ておられる歌集に心から感動し吸い込まれ  
てゆきました。そして、とても憧れました。  
そんなあるとき、才恵様から熱心な「地  
中海」短歌会へのお誘いを頂き、はてさて  
私に出来るだろうかと随分悩みましたが、  
短歌の勉強をしてみたくなり入会を決意し  
ました。

日頃「宙の会」の歌会では田土先生ご夫  
妻をはじめ皆様方にご指導をいただき、ど  
きどきしながらも楽しく和やかな時間を過  
ごしています。この度「今月の二人」にと  
の連絡を頂き心臓が飛び出すかと思うほど  
驚きました。とても私など、まだまだ日も  
浅くおほつかないので辞退をと思いましたが、  
反対に背中を押されて「やりましょう。  
頑張ってみて下さい。」と励まされ勇気を  
出して受けさせて頂きました。

私のまことに稚拙な歌をこのような晴れ  
がましい場におとりあげ頂き心から感謝し  
ております。有り難うございました。

◆今月の二人・丹羽哲也品評◆  
我が城は姫路にあらず

丹羽さんは、東京・江東区在住。百貨店に勤め、柏に異動の際にも一緒だった同期四人との繋がりには深かったようだ。

・早朝の飲食街の裏通り四人で帰る麻雀のあと

徹夜で麻雀をしたこともあったのだろう。麻雀をするには、四人はちょうど良い。下の句に、どことなく充足感が漂う。

・二日後にゴルフの約束せし友はくも眼下出血で倒れしという友の一人が倒れた時のこと。「二日後に」というのが、いつから二日後なのか、このままでははつきりしない。ゴルフの約束をしていた日の二日前に倒れて、ついに約束は果たされることがなかったということなのだろうか。

・出勤時会社近くの喫茶店いつも来る友 今日も来ない

前歌の、倒れた友のことを言っているのだろう。いつもと同じように出社前に喫茶店に立ち寄るが、友は現れない。「今日も」というところに、友を待つ時間、思いやる心が表れている。

・倒産後気持ちの整理やっとなつき社章を沼に投げたり「さよなら」

バブル崩壊後、会社は倒産。丹羽さんは残務処理のため残されたようだから、気持ちの整理はなかなかつけれなかったことだろう。社員章を沼に投げるといふ具体的な行為によって、あるいは気持ちの整理をつけようとしたのかもしれない。

・我が城は姫路にあらず駅前街中に建つ 廃墟となりて

勤めていた職場は、今や廃墟となっているという。それでも、大切な「我が城」と思えるのは、いかに丹羽さんが一生懸命にそこで働いたかということでもある。

◆今月の二人・久保幸子作品品評◆  
歩こうよわれに呼びかけ

評者・久我田鶴子

久保さんは、大阪の池田市在住。一冊の歌集との出会いが作歌に繋がったようだ。

・歩こうよわれに呼びかけ支度するリュックを背なかに嵯峨野あたりへ

リュックを背負って、ちょっと歩こうと、今日は嵯峨野あたりへ。「歩こうよわれに呼びかけ」というところがいい。自分で自分の気持ちを引き立ててという感じがする。

・ゆうゆうと小倉の山に飛ぶ鳥見晴らし如何にと見上げて思ふ小倉山に飛ぶ鳥ともなると、飛び方も違っているようだ。その鳥を見上げて、鳥の目が見ている視野を想像してみる。その時すでに久保さんの心持ちも「ゆうゆうと」に連なっている。

・さまがわり築二百年の薬葺きにエスプレッソとパンを売る店 築二百年の薬葺きの家が、エスプレッソとパンの店に、とは。確かに、大きな様変わりだ。「さまがわり」と言ってしまうのは、最初から種明かしを見せられたようで、ちょっと残念。

・くれなずみシルエットとなる嵐山きよらな瀬音聞きつつ歩む 暮れ方になるまで嵯峨野あたりを歩いて、シルエットとなる嵐山まで見、清らかな瀬音まで聞いて……。一日の満足感は、ゆったりとしたリズムの中にも表れている。

・鈍豆茶煎れば手づくりのおだやかな香りに厨の包まれてゆく 煎るところから始まる鈍豆のお茶。厨は、香ばしい香りではないになったことだろう。「おだやかな」は「香り」にかかっているが、それはまた久保さんの心持ちでもある。豊かなひとりの時間を過ごされているのが伝わってくる。

・春の夜のしらしらあけを船出づる南の伊豆の濃みどりの海

・沈丁花春の夕への庭の面に冷たく匂い広ごりにけり

それぞれの作者がどなただったか正確な記憶が薄れてしまつて……。中学生になつてからの国語の教科書で、私が初めて出会った短歌の中の今も浮かぶ二首です。

元来、本を読む事は好きでしたが、三十一文字の包含する豊かさに驚いたものでしょう。特に初めの一首は鮮烈でした。脳裏にパァーと南国のたゆたう海が浮かび、短歌の表現の素晴らしさに魅了されるようになってきました。今にして、それは短歌との初めての出会いでもあったような気がします。

でもそれも一瞬の虹のように、その後の学生生活、就職、結婚と呆れるほど短歌には縁がなく、夫の転勤、名古屋・東京と転居を重ね、子育ての悩みもあつたり、生活に紛れて暮しておりました。それでも新聞の短歌欄を見るのを楽しみにしていたかもしれません。

短歌が私の生活に近付いたのは、埼玉県の杉戸町に住んで、少し自分を見つめるようになってからでした。

その頃、町の文化活動の一環として短歌講座の募集があり、受講したのが私の第二の短歌との出会いでした。全くの初心者ですが作歌に向きあい、詠み、更に対象を観察するという事で、生活に刺激を受けたのです。その後、講師の先生は健康を害されて短歌会は中止になりました。

それから何年後、仕事で出会った古武



治子さんに白岡短歌会への入会を勧められ、再び短歌に巡りあつたのです。真に、短歌は私を忘れずに近付いて来てくれたとしみじみ思います。それを契機として「地中海」への入会が出来、これが私にとって第三にして最大の出会ひになったのです。自分の力不足が恥ずかしく不安なスタートでありましたが、関根榮子先生のご指導に応えよ

うと張りのある日々でした。

初心者の私でも先輩の皆様は質問感想等述べる毎月の歌会は、とても新鮮に映つたものです。皆様の歌に違つた視点を感じ、自分にはないものを思います。最後に頂く先生の講評は、嬉しくもあり恐くもというのが短歌会の醍醐味なのでしょう。出会いの有難さを感じる時、白岡短歌会の年月は、私の人生のなかの貴重な「出来事」と言えるでしょう。

こうして一文を書かせて頂いていると、胸奥に沈潜していたものが、フツと形をつくって甦ってくるのを感じます。遠い少女の日の感懐から始まった、短歌に纏わる私の来た道を振り返る作業でもあったようです。

私は既に高齢者といわれる年齢に達しましたが、全体の中の自分という視点を忘れずに、心して過ごしていきたいなど反省を込めて思っています。

ともあれ、「よく見る」「よく思う」それを、日々の生活のなかの私の座標軸としたいなとも思います。つくづくと周りの方々に支えられて来ました。健康で短歌をつくり、それを生きる証のひとつとすることができたらとても嬉しいことです。